

# 研修報告書 No12

聖マリアンナ医科大学病院 研修医

研修施設：佐川町立高北国保病院

四万十町国保大正診療所

この度は、私の高知県での地域・僻地医療研修に多大なるご協力をしていただき誠にありがとうございました。研修終了に伴い、研修報告をさせていただきます。

## 僻地医療の選択

私共の研修プログラムでは、地域または僻地医療のどちらかを選択することができます。私が僻地医療を選択したきっかけは、「今経験しなければ、将来自分から経験することはないだろう」という考えでした。研修の内容としては、川崎周辺の地域医療か高知の地域医療を学ぶかという地域特性の違いが大きなものであろうと考えました。もしかしたら生涯働かないかもしれない場所の状況を学びに行くよりも、現実的に働く可能性のある地元で地域医療を学ぶという選択をした同僚も少なくありません。「知らない世界に飛び込むような気持ちも、研修医という立場で背中を押していただけるなら、飛び込んで今までにない貴重な経験が出来るだろう」というのが僻地医療を選択した理由でした。

## 研修報告

高知龍馬空港に着き、まずは寒さに驚きました。関東よりも南にあるから少しは暖かいかと考えましたが、むしろ寒いぐらいでした。最初に見た医療施設は高知医療センターであり、再生機構の長瀬さんが仰っていた「高知の医療は先端技術で劣らない」ことの象徴のようなもので、中核病院としての存在感を感じました。しかし、実感したのは高知市から離れた土佐大正診療所でした。地域を通してネットワークの充実した電子カルテと医療センターへのコンサルトのシステムは、散発した診療所の多い地域よりも充実かつ先端的な医療が受けられる可能性を感じました。また、「コンサルトがしやすい」というのは、医師個人として働く不安に対して、重要な安心できる材料の一つです。他にも、医師が働きやすいように、研修日の設定や診療所と病院のローテーションのシステムの存在を知り、家庭医療を目指していた経緯もあり、こんな環境なら仕事が出来るとかもしれないと頭を過るほどでした。しかし、当直の予定表を見なくても、夜間の救急当番を昨晚担当していなければ今夜は自分の番とわかってしまう現実、やはりその場所で働くことを躊躇させるものでした。偶然か、土佐大正では予想よりも多くの子供や若者を見かけました。構原にいる先輩に会いにいった時も似た印象を受けました。両者よりも高知市に近い場所にある佐川町や週末の旅行であまり子供を見掛けていなかったのも、不思議な感じでした。繁華街から離れれば離れるほど若者が減ると考えていましたが、構原のような町計画や医療がしっかりしているエリアは家族が住みやすいということなのでしょう。高齢化社会や医療費削減などの社会の流れの中で、医療が発展していく一面を高知で見ることができました。

高北病院での研修は、院内だけでなく介護老人保健施設やデイケアなどバラエティに富んだ内容のプログラムを計画しておいてくださり、一ヶ月ではこなせないくらい盛りだくさんでした。プログラムは基本的な検査のやり方から、出張診療所と病院内でのマネジメントの仕方など、学ぶことが非常に多かったです。基本的な検査の方法などは、私が勤務した病院では検査技師さんに任せっきりで、今後自身でやることは少ないかもしれないけれど、「もしやる必要ができたなら」などと考えるとこのままでいいのかなと思う部分でもあったので、非常によい経験になりました。場合によっては、自身で CT も撮影するという環境も聞き、なおさら、家庭医療をやろうと目指し、どの科に進んでもプライマリケアが出来る医師になりたいと思った私には刺激となる環境でした。

そう遠くない将来に、初めて見るテレビ番組が 3D になる子供が出てくるかもしれません。科学技術の進歩にありがたみを感じる一方で発展の経緯を知る機会が失われ、一步前の方法に戻って代替できなくなることや、整った環境なしに何かを行うことができなくなるかもしれないと不安に思います。医療も体内の情報をすぐ CT など技術に頼って得ようとするのではなく、診察手技やレントゲンなどステップを踏んで推察していくことが基本であり、それは医療資源が限られているなら特に必要なことだと思います。今回の研修では、重要な検査が施設間の関係で翌日に当てにならない結果として報告されるというようなことも聞きましたが、シンプルな医療と先端技術の両者を体験できました。初期研修は、医療の基礎を学ぶ重要な期間ですが、そんな期間に高知での研修がとてもマッチしている様に感じました。

以上、研修報告とさせていただきます。